大河滔々と・・・

埼玉県陸上競技協会
西村会長　小原理事長　　おめでとうございます。

・・・・・それは戦後間もない時期のこと。

関根幸夫先生が体調を崩し、自宅で安静状態。
その日は春高陸上部（正式には旧制中学）の大事な試合だったが、教え子の試合に行けなかった。

選手は竹村　保正先輩方。
そう、竹村義人さん（３代目顧問　２６回卒）のご尊父である。
ご自身が進学された慶応大学の「K」と早稲田大学の臙脂をあわせて、現在のユニフォームを考案された方だと、私は聞いている。

竹村先輩らは大会で奮闘！
総合優勝を遂げてみせた。

竹村先輩らは優勝杯をかかえ、病床の顧問に結果報告に向かった。

関根先生は、自分がいなくても頑張って総合優勝してくれた選手達に大感激した。

うれしさのあまり、寝床から飛び起きて、ある詩を書いた。
猛烈に感動した熱い想いを、一中夜寝ずに書き上げたという。

それが「勝利の賦」である。

陸上部 勝利の賦

作詞　関根幸夫　作曲　丸山　先生

一、忍苦の練磨ここに
花を開きて馨るかな
栄光我に輝きて
ああ回天の雄図なる

春高ハンマー投げで総体初入賞の加藤先輩と、
天賦の才にあふれたスプリンター酒井先輩。
黄金期の猛者たちである。

二、若き力の感激よ
破邪顕正のまこともて
貫く命一すじに
努めし幾日知るや

三、楽しからずや栄光の
映えて明るきグランドに
手をたずさへて胸張れば
富嶽も共に歌ふべし

四、快なり道は開けたり
紫紺の旗をふりかざし
いざや進まんよく高く
勝利の女神我を呼ぶ

五、ああ春高の伝統に
光輝をそへしアスリート
聞け優勝の感激の
集ふ力の雄叫びを

この歌は関東以上の規模で優勝したときのみに歌われる。

春高陸上部は、関東インターハイ８度の総合優勝経験を持つ。
その後も１，２点差までせまるも総合は採れなかった。大塚監督が選手の時代には、２年連続１点差で総合優勝を逃す。
やはり関東で総合を狙うには、個人優勝３種目、表彰台に５種目以上、両リレーで入賞・・・・これくらいの層の厚さが必要だ。

現実的に考えると、春高の入学制度ではきわめて難しいだろう。
奥岡、後藤を配しての布陣でさえ、関東では県内最多得点高校にはなったが総合優勝はできなかった。

しかし、脈々と受け継がれていく伝統をしっかりと受け止め、春高は永遠にチャレンジしていく。

「勝利の賦」を歌うために。

「春高陸上部の歴史」を創生してきた男達・・・。
「勝利の賦」をみなで歌って、西村先輩、小原先輩を祝った。

・・いやぁ・・錚々たる顔ぶれだ・・・

筆　撮　　３７回　野本　順一